



まる ○福連携

福祉分野からみた異業種との対話

一般社団法人福祉システム北海道代表理事

□連載□ 高橋 銀司氏

エピソード3 理美容福祉専門士 水野 真吾氏

第3回は理美容福祉専門士の水野真吾さんです。

●理容師を目指したキッカケは何だったんですか

漠然と理容師か福祉職のどちらかで迷っていました。家系的に理美容の仕事をしている人が多く、その影響で理容師を選びました。今考えれば多くの選択肢はあったのですが、小さいころから身内を見てきたので、「手に職をつけるならコレしかない!」と思ったんですね。そして高校卒業後、すぐに専門学校には行かず、先に理容室に就職しました。周辺業務をこなしながら、通信教育で勉強して資格を取りました。

●初めて理容室で働いてみてどうでしたか

免許取得まではモデルやウィッグなどを相手に、深夜遅くまでカットの練習をしていました。技術職なので、技術を磨くと同時に知識も学んでいかなないと上達しません。ですので、免許取得のころには一人前に育っていて、資格がないだけというのが望ましい状態でした。

●理容師のほか、理美容福祉専門士という資格も持っているんですね

福祉施設などに訪問して、高齢者や障害のある人の髪を切るのが主な仕事です。理容師か美容師の資格者が講習を受けて、試験に合格すれば取得できます。私が資格取得したのは7、8年前になりますが、実技もある本格的なもので、合格したときはうれしかったですよ。ですが、「福祉と理美容の融合」は当時、私の周りではあまり理解されず、取得したこともほとんど言っていないのでした。

●理美容福祉専門士のやりがいは何でしょうか

いろいろあります。例えば、100歳のお年寄りの方の場合、その方の人生の中で何百回もお金を払って髪を切りに行っているのだと思います。その中で、自分がその人の髪を切る最後の理容師になるかもしれないと思うと、感慨深い思いになります。お店で働いているよりも、設備など制約も多いのですが、その分やりがいを感ずますね。その場の対応力やお客さんとの出会いなど、店舗型ではあり得ない経験が自信につながっていると思います。店舗で切っていたときは正直、お客さんの「ありがとう」を、社会人同士の「当たり前」のあいさつのように軽く感じていた部分もありました。今は、1、2カ月誰とも話さないかのような家を訪問して、久しぶりに話す人が私というときもあります。髪を切る中で、相手の気持ちや生活環境が背景に見えたとき、髪以外の手助けとか、心のケアも大事だと思っています。そのため、心理学を勉強し、メンタル心理カウンセラー資格も取得しました。利用者の中には、うつ病で何年も外に出れず、腰まで髪が伸びてる方もいらっしゃいます。札幌市内にも大勢います。髪を切るだけなら誰でもできますが、髪を切るだけの作業ではなく、そうした方たちに対して、もう一歩踏み込んで心のケアもしたいと思っています。身も心もすっきりみたいな。

●力を入れたり、注意していることはありますか

感染症に気をつけています。カミソリをするときでも、ささくれ1つでもあれば、C型、B型肝炎の感染リスクがありますので、自分の手に出血がないようにケアをしています。施設職員さんにも、感染症があれば報告してもらいます。



「心のケアまで踏み込みたい」と仕事への思いを話す水野氏



みずの・しんご 1982年生まれ。高校卒業後、通信教育で理容師資格を取得。東京都内ヘアサロンでスタイリストとして勤務。31歳で理美容福祉専門士資格を取得後、現在は札幌市を中心に介護施設や病院、個人宅などへ訪問理美容サービスを提供している。

自分が万全であるのが最低限必要です。また、風邪をひかないなどの体調管理も特に気を付けています。自分自身の免疫を高めるのも欠かせません。今は特に新型コロナウイルス感染が拡大していますし、人の顔を触ったりするのは理容師が多いと思うので、とても気をつけています。

●業務の中で、どういう部分が難しいですか

いつも難しいと感じるのは介護施設や病院で髪を切る際に、相手の体調に合わせたカットが必要になるときです。例えば、ベッドを上げると、血圧が上がって倒れてしまう方がいて、ベッドをほとんど上げずフラットな状態で切るケースがあります。ほかにも、上半身を起こしても5分しか維持できない人の場合は時間があります。こういう方たちへのカットは、一般の人からは普通の仕上がりに見えても、同業者にはカットの粗さを気付かれるレベルになってしまいます。ですが、そのレベルの仕上がりにするにもテクニックが必要です。理容室など店舗で働いている人に急に頼んでもできないと思います。

●福祉と理容の融合という立ち位置にいる人だからこそその高度な技術ですね

ただ、葛藤(かっとう)する瞬間もあります。理容師の仕事(カット)の質を考えると、どう

しても仕上がりが不本意な場合もあり、福祉と理容のバランスに悩むこともあります。「もうちょっとキレイにしたかった」と反省の日々です。ほかにも、利用者さんがカットを望まない場合もあります。「これから頭の手術をするから坊主にしてください」と病院から依頼されるのですが、利用者が若い女の子の場合だと、家族から「お願いだから坊主はやめてあげてほしい」と強くお願いされるときがあります。ですが、命に関わる病院からの依頼です。やらねばなりません。いつも板挟みのジレンマがあって、本人、家族に「坊主にしてしまってますみません」と謝ります。家族の心も痛いほどよく分かりますし、心の中で土下座するくらい謝っています。でも、命の方が大事です。そういうときには患者さんや家族、私たちに寄り添ってくれる医師の方もいらっしゃいます。とても大きな存在です。

●命に関わる場面も多いのですか。印象に残っている体験はありますか
在宅で半年に一度、髪を切る難病患者の方が

いました。1年ごとにだんだん体調が悪くなっているのが分かり、昨年、訪問したときには病状の進行を感じました。その方はすごく髪が伸びていたので、カットするために体勢を起こさなければなりません。切っている最中は体調変化に気をつけていたのですが、その日は髪を切っている際に、そのままその場で亡くなりました。家族が同居されていたのですが、そのときは不在でした。私は「最期はできる限り家族に看取られた方がよい」と思っています。駆け付けた医師には「お兄さんのせいではない」と声をかけていただけましたが私自身ショックがとて大きく、しばらくの間、脳裏にその瞬間がよぎり、その場で動けなくなるほど怖い経験でした。

●亡くなれるショックは大きいですね

もしかしたら体を起こしたから悪化したのかもかもしれませんし、本当ならば「最期を看取るのが私ではなかったのではないかと」考えてしまいます。病状によっては少しの揺れや体の角度だけでも命に関わりますよね。その経験から、失敗を恐れずに何でも進むのではなく、ときには止まることも必要だと痛感しました。利用者さん宅に訪問し状態を見て、その日の様子に違和感があれば断る勇気も必要。何でもかんでも依頼を引き受けるのではなく、相手の体調に合わせて仕事ができるようになりたいです。

●水野さんにとって理容師と福祉はどういうものですか

15年ほど前、道内で訪問理容サービスが広がる前に、20代前半だった私は電話帳で各施設に電話して、こういう仕事をやりたいと連絡したことがありまして、40件電話して2件の反応があり、その施設にハサミとクシとクロスを持ってうかがいました。訪問という形でどこまで対応できるか自分でも分からないまま向かいました。施設に着くと入所者の皆さんは理美容店に断られ、そのショックでさらに行きたくないという悪循環の実態がありました。そのため、施設スタッフや家族が散髪し、虎刈りのような髪形でした。初めて訪問したときは、たまたま家族の方がいるときで、カットした仕上がりをを見て、ご家族がうれしくて泣いていました。入所者さんも普段は無表情らしかったのですが、笑ってました。笑った顔を久しぶりに見た家族の方はさらに泣いていました。その様子を見て、「この仕事を続けていきたい」と強く感じました。30歳になるまで技術を深め、それからこの仕事をしようと思っただけで働いていました。同僚には理解されず気がくじけそうなきももありました。でも、耐えて良かったです。もっとこの仕事をする方が増えればと思っています。

■あしがき

「理容師」へのインタビューのつもりで臨んだ水野さんとの対談。自己紹介で初めて聞いた「理美容福祉専門士」という資格が気になり、その仕事や経験などいろいろとお話をさせていただきました。

普段、私たちは髪を切りに理美容室へ足を運び、なじみの担当理美容師さんにカットしてもらいながら会話を楽しみますよね。身だしなみを整えたり、お店に向かう途中で外の空気を吸うことで気持ちがりフレッシュされます。要介護でも、障害があっても、「自分の希望する担当者に髪を切ってもらいたい」と思う人は多いはず。訪問理美容を提供する環境が整備されてきたり、訪問に関心を持つ理美容師の方が増えてくれば、「訪問理美容を利用するのか」「理美容室に行くのか」の選択肢も広がり、気の合う理美容師さんを見つけたり、より深い人間関係が築けたりして、理美容を楽しむことができるのではないのでしょうか。

次回(最終回)は美容師の吉本友美さんです。

※対談は感染対策を徹底した上で行っています。

▶一般社団法人福祉システム北海道◀
ホームページ <http://fukushi-sh.net/>
問い合わせ先 info@fukushi-sh.net